

日々の処にハ 何もふしゆなきくらしているへ なれとさき
へ とをなるこふなる 是をおもふ八人間心 おもふ迄 これあんしんの道きゝわけて はかりてくれ またよくへ事情
もつて はなしす 咄しにくい 一寸きけバ身にこたへて な
をこたへて 年限とおもへと とおもならん 又々はなしつた
へんならん所ある これたけ一寸はな」(67才)

しつたへておこふ

18 明治廿六年十二月十八日朝 御願濟引続キテノ御咄し
さあへ一寸事情有るはなし 一ツして なんならん もふこ
れ だんへいくらでも どれたけでも いのかれるたけ
段ゝいのいてくれ うこけバなんほても うこかれる さあ
へせわしいへ せわしいてならん あさもはよふから よ
ふもかけ 足(是)迄の咄しつたへたる 一寸かゝりた そこ
でいそかしい」(67ウ)

なる なんぼでもいそがしいへ なんぼはこんでも 身上さ
わりなく 日々いさむ 日々いそかしいなるほどふ 糸んりよ
きがねなく これまでつたへたる その通りちかよる 日々う
れしや たのもしや よふきゝわけて おさめにやならん ど
んな里もわかる そこて席いそくへ しゆよぶじさいしてお
く ちかふ事さらにない これまで誠事情の道ハあしきゝとお
してある とんな道も通してある」(68才)

そのかわり道あきらか とこからいふても ぢゆふよふさとし
かけるへ はこひ さあへいそかしいへ たゞはるへ
はやくもとりたい ちゆよぶぢさいきてきたと まんそくの
道 今に有るほどに よふきておけ

(注) この日付のおさしづは見当たらない。「明治二十六年十二
月十一日 朝 事情願濟みし後、引き続き御話あり」が、こ
れに相当する。なお、「足」とあるのは、すべて、他の個所を
含めて「是」の意である。

19 廿六年十二月朝 本席様昨夜齒ノいたみ二付御願

さあへ身の処 心糸んと云ふ 事情と」(68ウ)
云ふハ如何なる事であるふ それへたすねる処 何もあんし
る事いらん 又萬事事情なる処をさめ たのしみ事情くらし
ている とふがよかるふ こふがよかるふ 一ツをさめて 十分
なる事情なれど 一ツさとしておかんならん ときのやしない
さとしたきり おさまりたる 日の中かわりばんして大せつ
うけ取 どんと事情かまわず 日々かわり番 十分りて有 これ
まで世界何」(69才)

時ともわからん こしたる よふきゝわけ 日々の処とをしよ
ふと こふしよふと どしよが守りてくれるか事情たつてと云
ふハ きのやしないにならん もふひとりゆわんよふ とりあ
つかへ是迄ゝおさまり これからさき とこにいるやらなあ
といふよふにして 日々とりあつかいしてくれるよふ

(注) これは「明治二十六年十二月十六日 昼十二時頃 本席昨
夜齒痛み頭痛に付願」である。正文と比較すると脱字が見られる。

20 明治廿七年一月十一日 夜十一時廿分刻」(69ウ)

限の咄し

さあへこれ咄しかけたて やれへたんへはなしもつて
これまでへ よふへてなかつたであるふ これとへ年か
あける 始まりへ もふこれ まあへ一寸まねして やれ
めづらしや なあへはじめかけたる 古い道新しいと云ふ
新正月ハすんだ 古い正月しもふて 正月三十日 長いよふな
ものなれと 云ふいるまに二月 さあはしまる とふゆふ事」

(70才)

はしまる 一寸はやくさきにさとしおこふ こんどゝ云ふこん
とハむつかしい 世界つくもる おもわくの道かと しあんせ
にやなるふまい とふゆふ風がふくやらわからん 春風のたの
しみの中に そうへなつふゆなきの あちらてもむらへ
こちらてもむらへ 秋風わ とんとどをなるまい さあへ
其風かな ふせまつといふ とふゆう道とゆうも一ツ道 きく
も一ツ道であるふ」(70ウ)

なんでも一ツの里かなくバおさまらん はやく道をしらしてお
かにやならん 一日もはやくにへ 道をおさめかけたる は
やく一ツの里をおさめてくれ 如かなる里もミへかける 道が
力わる 秋風かとおもへハ冬風 あちらてもむらへ さあ道
をわけるでへ はやくいそいで 何をゆふとおもふやろ そ
しり咄し あちらこちらの道 こわいおそろしい道もあるふ
またおさめ方の道も」(71才)

あろふ 西をむいてハやれへ 東をむいてハやれへ 一ツ
の道 実の道かある いつにとるとわ わかるまい 年あけた
ら出てくる よりくる事情二とんな事もつゝくるやら わから
ん とをゆふ事もをさめにやならん 人がたらいてハ 如何な
談示も出来よまい めいしよ一ツの里をゆるしてある とをゆ
う事はじまるも ま(む)つかしいてならん うかへきよろ
へ」(71ウ)

した道やないで 如何なる日かでゝきても めいへ世界あつ
まる処 おやさとゝいふへ

(注)70才の4行目、「なあへ」は「まあへ」。70ウの6行目「其
風かな ふせまつといふ」は、「その風の迫りという」である。
その他にも脱字、脱文が目立つ。そのため意味不明な表現がある。

21 廿七年一月廿二日 夜十二時三十分御本席御身上

さあへきよまての咄しハゆわん けふまてのはなしハゆわん
あすからのはなし もふこれ今年といふ もわすかの日から
もふ春やへ 一年の日がある これとんときいて きかれん
よふなは」(72才)

なしや 足(是)か第一はなし ながい事わない あいてさ
しつかへもなかるふ どをいふも こふいふも道とゆふのもある
冬といふや ゆうまての事 春と冬との日 たゝかいの事
をみよ おさまりかけたら とをてもこふても おさまろ む
まれた時ハうつくしい きずのないへものなれと きずでる
やらわからん なをりたら一代ハとをれる 足から咄し事情を
ゆうくりきゝ」(72ウ)

とりてくれ まあへこれまでのしきにハ だんへのふかい
咄しがあるなれど 咄しのしよふかない 咄しかけたら それ
からぼつへ咄しかける なれと なんぼはなそふと おもふ
ても咄すたけハ とおもならん いゝきかしのうつし あとさ
きないよふ あとさきありてハいこふまい すき(り)なけれ
バなるふまい なにもかもはなしする ちやんとふてにとりと
めてくれ これハとんと」(73才)

とをゆふ事といなあと ゆふよふてハ どおもならん かい
てあつた処か字数ハ かづへいらん 今といふ 一ツちやんと
きまりの処をかへておけ 今までみんなよりをふでた事 足
迄の咄しほかにきいた里から おさめにやならん まんまる
あと九分ハ よふへいろいろかつきかけたかいなあ あしかつき
かけたがいなあと云ふよふかもの 一ツの色におさめにやなら
ん 是一ツの咄しのだい」(73ウ)